

アムールの風

（正統右翼の論理）

・第7回

田中健之
（黒龍會会長）

アメリカの追随勢力から独立するために

——玄洋社が目指していた自主外交——

今まで私は、今日の日本がアメリカの占領下に法的に置かれた軍事占領下にある、アメリカの追随勢力に過ぎないことを述べてきました。

悲しいことに日本は独立国家ではなく、プエルトリコと同格であることを説明してきました。

そうした体制の中で、日本が如何にして独立を回復することが出来るのかということを、真剣に考えて、実践する必要があります。

そのためには、明治維新以降に日本が長年苦しんでき

た、欧米列強諸国と締結した不平等条約を克服するべく、生命懸けて実践努力を重ねてきた、先人、先覚に学ばなくてはなりません。

特に明治時代以降、活発に条約改正運動に取り組んできた、玄洋社の先人先覚の動向には刮目する必要があると

ます。
玄洋社が目指していたのは、対欧米の追随外交ではなくて、あくまでも自主外交です。

それは、中華革命や朝鮮開化派を支援し、フィリピン

の独立の支援をはじめ、インドやベトナム、ビルマ、アジアの独立運動を支援してきたのです。

それはなぜか？ すなわちそれらの支援活動が自主外交に繋がるからです。

日本には当時、日英同盟がありました。日本政府はイギリスからの干渉を恐れていました。つまり中華革命運動の支援やインド独立運動の震源地が日本になると、同盟国のイギリスから干渉され、圧力が加えられることを恐れていたのです。そのため日本政府は、独立運動家や中華革命家たちの日本への亡命を許しませんでした。

こうした欧米と協調路線を計る日本政府の外交の中で、玄洋社はあくまでも日本政府の圧力に屈することなく、中華革命家やインド独立革命家の日本亡命を手助けし、庇護しました。そうすることによって日本が自主的にアジアの独立を支援し、強いアジアを建設し、それらの国々と連帯しながら欧米勢力をアジアから駆逐する、すなわち彼らのアジアからの撤退を企図したのです。

まさにそれは民間人の力による日本の自主外交、民間外交を通して、日本のアジアに対する大義を明らかにしたのです。玄洋社の系譜に連なる黒龍会も、その実践を行いました。

よく大陸浪人とか言われていますが、彼らには政府には持つことが出来ない、先見的な目があったのです。だからこそ、玄洋社や黒龍会は、海外において、頗る影響力がありました。戦後、G H Qが彼らを恐れた所以がそこにあります。

なく、戦争によって不足する食糧事情を憂いて、国民に食糧が行き渡るべく、食糧増産問題に心血を注ぐなどをしていました。

玄洋社は支那事変に反対して、蒋介石と直接的に講和をするべく、頭山満翁が密使として自ら中華大陸へ渡って蒋介石と会見する計画でした。また、東條内閣を東條幕府と呼んで対峙してきました。

しかしG H Qは、玄洋社や黒龍会を戦争推進のための原動力的な機関だとして、はじめから玄洋社や黒龍会を目的にしてきました。

そのためG H Qは、広田弘毅元首相が玄洋社出身であったことに目を付けて、彼を黒龍会の会員として戦争を指導したという理由からA級戦犯として捕え、文官として唯一死刑にしたのです。

——親欧米派はいじめっ子の論理——

明治政府の外交として挙げられるものに「征韓論」があります。

小学校で征韓論は、「西郷隆盛が武力で朝鮮を併合しようとした。それに対して大久保たちがカネも力もないの

こにあります。

G H Qは終戦直後、玄洋社や黒龍会を潰そうとして血眼になります。結社解散は勿論のこと、その財産、家屋、文書、資料のすべてを没収し、時の玄洋社々長で、後に福岡市長として名高かった進藤一馬先生や黒龍会二代目主幹の葛生能久翁をA級戦犯として摘発し、巣鴨プリズンに収容します。

G H Qは、玄洋社や黒龍会の指導者を秘密結社やマフィアの頭目だという認識でしたから、そのリーダーともなると熊のような豪傑を想像していたのでしょうが、紳士然とした進藤一馬先生や上品なインテリの老人姿の葛生能久翁を見て、自分たちが頭の中に描いていた人物像と明らかに違うことから、大変に驚いたということでした。

自ら東方会を率いて、戦時中に東條内閣を独裁的だとして激しく批判し戦った結果、抗議の割腹自決を遂げた玄洋社出身の代議士中野正剛先生の秘書として活躍した進藤一馬先生は、戦時中には反東條内閣の活動家として刑務所に入れられていました。そのために戦争を直接煽動する立場にはありませんでした。

葛生翁も大東亜戦争を中心になって煽動する立場にはなかった。だから、それはやめろということでも西郷を追い出したのだ」と教えていますが、それは真実とはまったく違うものなのです。

当時、大久保利通や岩倉具視らは欧米を視察しに行きます。技術の高さとか近代的なものにびっくりして、欧米との間で戦争になったら、日本が負けてしまうという恐怖感を持ちます。

そして西郷隆盛が使節として朝鮮に行けば、欧米から内政干渉を招くのではないかということでもそれを恐れるわけです。そこで朝鮮に使節として行くと言い張る西郷を、政府が追いやることにしたのです。

一方、西郷隆盛は勝海舟を通して、朝鮮国王の父上で朝鮮最高の実力者である大院君と内々で交渉していたのです。大院君の日本人の友人は勝海舟です。勝海舟と西郷は、江戸無血入城の談判を果して以来、深い信頼関係がありました。

そこで西郷は、当時、朝鮮の政治の要である大院君に宛てた勝海舟の紹介状を持って、大院君と会えば、きちんとした話ができるだろうと考え、事前に勝海舟と共に大院君との会談のための根回しをちゃんとしていました。そのために西郷は、烏帽子直垂の正装で非武装の使節

を派遣すると主張していました。

これに対して、大久保や岩倉たちの親欧米派は、こうした西郷隆盛の自主的外交の動きを封じ込めました。それが明治六（一八七三）年の政変です。

朝鮮問題に端を発したこの政変で西郷を政府から追い落とした、親欧米派の大久保や岩倉たちによって、日本は親欧米追随路線へと、一気に舵を執ることになります。あたかもそれは、今日の日本が、原爆を日本に投下したアメリカに恐怖して、アメリカの言いなりのまま、唯一追随している体制を彷彿させるものがあります。

日本が欧米列強諸国と締結した不平等条約から脱するために、日本独自の自主外交が重要であると、西郷隆盛は考えていました。

彼はそのためには、アジアと日本との関係を大事にしないとイケないと思っていたのです。

そこで西郷は、まずは皮切りに一番近い朝鮮との関係を重視する必要があると考えたのです。朝鮮はまた、日本の防衛の要でもありました。そこで西郷は、朝鮮とどうやれば上手く付き合えるのかを深く思索した挙句、自らが使節として朝鮮に赴き、大院君と直談判して信頼関係を築くことが重要だという結論に達したのです。

た挙句に、それならば自分はいじめっ子の使い走りをしてでも、いじめっ子と一緒にあって、いじめられっ子をしていじめようと決意して、いじめっ子のグループにしがい付いているという論理と等しいものがあります。

大久保や岩倉の親欧米派は、欧米追従外交を展開するために、欧米貴族の社交場をまねた鹿鳴館を築き、每晚仮面舞踏会を開くなどして、軽佻浮薄な鹿鳴館外交を行いました。

初代文部大臣の森有礼などは、キリスト教的な信仰に基づき倫理道徳観を身につけた価値観の上に立ち、日本語を排して英語教育を行うべきだとする、「日本語廃止論」を唱えました。

その上、森は「日本人は野蛮だから、青年男女はすべて欧米白人の優秀な人種と混血しないとイケない」とする人種改良論を叫び、それを方々で講演して回りました。

そうした急進的な欧化主義者、森有礼に反発した愛国者、西野文太郎によって彼は暗殺されました。

「天皇を頂く我が国の基礎を破壊し、我が国を亡滅に陥れようとした」

と、西野は斬奸状に認めていました。

しかし、大久保や岩倉などの親欧米派は、朝鮮とどうやって上手く付き合うかなどという考えは毛頭なく、西郷を政府から追い出しました。

彼らは、現在力がある欧米諸国とさえ上手くやっていけば良い、彼らと調和さえしていけば事が足りると考えていました。

明治八（一八七五）年に生じた江華島事件は、西郷が下野した後の日本政府が、朝鮮に対して行った砲艦外交でした。それを主導したのは、大久保や岩倉の親欧米派でした。この時に西郷は、「天理に悖る行為なり」として政府を激しく批判しています。

こうして護国興亜を信念とする西郷派と、脱亜欧化を主柱とする親欧米派の大久保、岩倉派との激しい対立がありました。

大久保や岩倉らの親欧米派は、日本が欧米の真似をすれば日本が欧米みたいに強い国になれるため、日本は植民地にならなくて済むのだという考えなのです。

それは正に、学校における弱い者いじめの論理です。つまり、本来は自分が弱くていじめられる側である子供が、いじめっ子を恐れるがために、自らがいじめっ子の側になれば、自分はいじめられなくて済むのだと考え

こうした親欧米派による「鹿鳴館外交」や「日本語廃止論」、「人種改良論」などに対して、護国興亜派である西郷隆盛は何を考えていたのでしょうか？

大正十四（一九二五）年に政教社という出版社から、西郷隆盛の遺訓を頭山満が講評した『大西郷遺訓』という本が刊行されています。

この本は、平成三十二（二〇一八）年の今日までいろいろな版元が再版を繰り返しており、実に九三年間も読み継がれてきた超ロングセラーです。その中で、「南洲翁（西郷隆盛）が常々言われていたという言葉」として、頭山翁が次のようなことを語っています。

「日本は支那と一緒に仕事をせなければならぬ。それには日本人が日本の衣物を着て、支那人の前に立つても何もならぬ。日本人の優秀な人間はどしどし支那に帰化してしまわねばならぬ。そしてそれらの人々によって、支那を道義の国に、立派に盛り立ててやらなければ日本と支那とが親善になることは出来ぬ」

このように西郷隆盛は、日本精神を持った者がどんどん中国に帰化しなければいけないと言っているのです。「大西郷の精神」とはまさに「弱気を扶け強きを挫く」という「博愛任侠」の精神です。西郷さんはアジアを愛情を

もって見据えていたのです。

頭山満翁に代表される玄洋社の志士たちは、西郷隆盛と同じような考え方をもって、欧米列強諸国による植民併呑に呻吟するアジアに同情し、それをあたかも自国のことのように捉えて、その独立革命を身の犠牲をもって、支援し続けてきました。

つまりそれは親欧米派である体制に抗して、日本の道義確立による自主外交をもって、欧米列強諸国と締結した不平等条約を改正するための活動をしていました。

日本の近代化のあり方が、民族の文化伝統に基づいた近代化なのか、それとも西洋の技術を取り入れ、精神までも開国してしまうような、まるで売春婦の如き近代化なのか。明治維新以降に日本が歩んで来た道を、私たちは熟考しなくてはならないのです。

——第二維新の魁、 明四事件から西南の役へ——

明治四（一八七二）年、士族が全国規模で連絡機関を持って、組織的に明治政府を転覆させようとする計画を立てましたが、すぐに露見して大弾圧されてしまいました。

明四事件が引き金となって、次々に第二維新のために志士たちが立ち上がり、遂に西郷が蹶起した西南の役に繋がっていくのです。

明治六（一八七三）年に征韓論争が起きた後、民撰議院設立建白書というものが出ます。

これは本来の明治天皇が、「広く会議を興し万機公論に決すべし」とする『五箇条の御誓文』に示された、日本の伝統型の民主主義に則り、薩長に対して国民側の意見を聞け、というのがこの建白書の内容だったのですが、政府はそれを受け入れることはありませんでした。

征韓派と言われた人たちのほとんどが、民撰議院設立建白書を出して、政府と対峙していきます。

彼らはそれによって、薩長藩閥政府から激しく弾圧されてしまいます。

薩長藩閥政府による弾圧に著しく反撥した彼らは、明治維新は、徳川幕府の首が薩長藩閥に挿げ替えられただけだとして、第二維新を志して、日本各地で蹶起して行きました。

明治七（一八七四）年、佐賀で江藤新平が蹶起した佐賀の変をはじめ、明治九（一八七六）年には熊本で神風連の変が、それに呼応して福岡では秋月の変が生じています。

「明四事件」です。

ちなみに教科書などでは、明治新政府が成立した後の各地の士族の反乱は、身分と金銭を奪われた士族が食い詰めた拳句、政府に対して反発したように記述されています。それは事実ではありません。

彼らは、単に武士の身分が無くなったからとか、金銭がもらえなくなったからというのではなく、薩長藩閥の独裁と横暴に対して、身をもって抗議の声を上げたのです。

そこに体制によって著された教科書の嘘があります。

明四事件は、古松簡二とか高山彦九郎の系統の影響を受けた久留米藩の人間が多く参加していました。河上彦斎、雲井龍雄も明四事件の関係者であり、また奇兵隊の大栗源太郎とか、いろいろな志士たちが明四事件には参加し、刑死しています。

全国規模で、薩長藩閥政府に対する士族の最初の抵抗運動が明四事件です。

明治新政府は、安政の大獄と並ぶとも劣らない大弾圧を断行し、相当数の志士が殉難しました。

明四事件こそが第二維新運動の源流なのですが、教科書では一切教えていません。

さらに同年十月には、山口県で前原一誠らによる萩の変が続きましたが、いずれも明治政府によって鎮圧されました。

ところで、玄洋社や黒龍会の人々も明四事件に関係した人々をはじめ、秋月の変や萩の変と関係があった志士たちと繋がっていました。

萩の変が起きると、頭山満をはじめ進藤喜平太、奈良原到など、後に玄洋社を結成した人々が連座して、獄に繋がれました。

明治十（一八七七）年二月、西郷隆盛が私学校の志士、一万三千名を率いて蹶起しました。近代日本最大規模の内戦ともいえるべき、西南の役のはじまりです。

士族の相次ぐ蹶起によって、西郷隆盛と彼の影響が強い私学校の存在を恐れた明治政府は、西郷隆盛暗殺と私学校を弾圧するべく密偵を送り込みました。

それが明らかになったことを怒った私学校の志士たちは、西郷を推して遂に蹶起します。

蹶起に際して西郷は、「今般政府へ尋問の筋これあり」で始まる文を認めて、蹶起の大義を明らかにしました。

「西郷隆盛蹶起す」との知らせを受けた福岡の武部小四郎と越知彦四郎は、それに呼応して、同年三月二七日に

蹴起しました。福岡の変のはじまりです。ちなみに武部小四郎と加藤堅武は、黒田藩の佐幕派によって弾圧されて殉難した筑前勤皇党の建部自強と加藤司書の遺児でした。

当初八百人の兵力で蹴起する計画でしたが、事前に情報を得ていた警察によって蹴起が抑え込まれ、五百人弱による蹴起を余儀なくされました。

福岡の変は間もなく政府軍によって鎮圧されますが、平岡浩太郎は唯一、西郷軍との合流を果せ、政府軍と戦います。

しかし、可愛岳突圍の際に負傷して昏倒していたところを政府軍に捕えられ、国事犯として禁錮一年の判決が下され、東京・市ヶ谷の獄に繋がりました。

この獄で平岡と一緒に暮らした志士の中には、明四事件の代表的な人物である古松簡二がいました。

福岡の変の指導者であった武部小四郎と越知彦四郎、加藤堅武らは政府軍に捕えられ、越知と加藤は同年五月二日に、武部は同月四日に斬刑に処されました。

福岡の変で蹴起した志士たちが捕えられた柵木屋の獄には、頭山満や進藤喜平太、奈良原到など、萩の変に連座した若き志士たちが幽閉されていました。

は、頭山満と共に、明治、大正、昭和の三代にわたって政財界に隠然たる影響力を持っていた、玄洋社の杉山茂丸の長男で、平岡浩太郎が経営する地方日刊紙『九州日報』の記者を務めていました。

まさに玄洋社の精神は、武部小四郎が頭山や進藤、奈良原たちに諄々と諭した、「皇国廓正の任」と「政権に対する監視」を命懸けで行うことにありました。

事実、玄洋社には、死生を共にする命知らずの人々が、黙って集まっています。そこに燃え燃え燃えている火のような精神は、烈々宇内を焼き尽くす概があつたそうです。

「頭山が遣ると云うなら俺も遣ろう。奈良原が死ぬと云うなら俺も死のう。要らぬ生命なら幾らでもある。貴様も来い。お前も来い」

という意気で人々が集まったのが玄洋社でした。玄洋社は、主義主張や利害が集まった結社では断じてありませんでした。そこに玄洋社の底知れぬ力と気迫があり、GHQはその玄洋社の精神を恐れたのです。

ところで薩長藩閥政府は、徳川幕府よりもっと軟弱な欧米追隨的な政府でした。

こうした体制に抵抗し続け、第二維新を志し、また欧米列強諸国の植民併呑の鉄鎖を断ち切るアジア独立運動

彼らは獄中に居たために、福岡の変に参加することが出来ず、そのために奇跡的に生命が温存されました。出獄すると彼らを中心に玄洋社が創立されます。

武部小四郎は斬刑に処せられる前夜、頭山らに対して、「日本の前途は、まだ暗澹たるものがある。万一吾々が失敗したならば、貴公たちが吾々の後継を継いで、この皇国廓正の任に当らねばならぬ。また万一、吾々が成功して天下を執る段になっても、吾々が今の薩長土肥のような醜い政権利権の奴隷になるかならぬと云うことは、

ほかならぬ貴公たちに監視して貰わねばならぬ」と、諄々と諭しました。

武部最期の日の朝、彼は頭山や進藤、奈良原がいる獄舎の前で立ち止まると、

「行くぞオオオオオオ」

それは、雄獅子の吼えるような颯爽たる声で、天も響けと絶叫しました。

「あれが先生の声の聞き納めちゃったが、今でも骨の髄まで沁み透っていて、忘れようにも忘れられん。あの声は今日まで自分の臍の腐り止めになっている」

と、奈良原到は、『ドクラ・マグラ』など、日本を代表する幻想作家の夢野久作に語っています。ちなみに夢野

を支援し続けた玄洋社や黒龍会の活動を、体制派の学者は「対外硬派」と称して、アジア侵略や軍部の先兵のような言い方をしています。

しかし彼らが、アジア侵略の先兵とする玄洋社や黒龍会に連なる対外硬派は、支那事変に反対して和平に努力をしたり、アメリカとの戦争回避に努めたりするなど、平和への努力を重ねてきました。

それに対して、対外硬派を欧米列強諸国からの怒りを買って危険だとして、弾圧していた政府の側が、むしろ支那事変を泥沼化させ、国力が著しく消耗した中で、大東亜戦争に突き進んでしまったのです。

対外硬派による運動はあくまでも、この国と国民とを如何にして護るのか、ということを考えて上での、国家と国民のための運動だったのです。



田中 健之 たなか たけゆき

歴史作家、維新運動家、昭和38年11月5日生まれ。福岡市出身。玄洋社初代社長平岡浩太郎の曾孫で、黒龍会を創立した内田良平の血脈を継承する親族。拓殖大学日本文化研究所近現代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所のモスクワ市立教育大学外国語学部客員研究員。日露歴史協会の会長。2008年に黒龍会を再興し会長に就任。主な著書に『韓国に祀られる人々』、『昭和維新』、『北朝鮮の終焉』、『実は日本人が大好きなロシア人』、『樞府中華』など。田中央公論「正論」、『歴史群像』などの論壇誌に多数執筆。